

## 明治二十年以前の翻訳

### 西洋医学書の出版動向

水間棟彦・酒井シヅ

西洋医学が日本に定着して行く様子はいくつかの面でもとらえることができるが、翻訳書の出版動向をみることもその一つとなる。ここでは明治二十年までの出版動向を見たが、その終りを明治二十年としたのは、この頃になると乱立していた医学校がある程度まで整理統合がなされ、明治十七年から施行された医術開業試験規則による医術開業免許制度が定着したからである。

西洋医学書の翻訳は天和二年（一六八二）の本木庄太夫によるレメリンの解剖書に始まるが、それが出版されたのは安永一年（一七七二）のこと、『解体新書』出版の二年前であった。解体新書の出版以後、西洋医学へ興味をもつ者の数は一挙に増えると共に翻訳書も現われてくる。しかし、それらが出版に至るまでにまだかなりの時間を必要と

した。例えば、最初の西洋内科書である宇田川玄随の『西説内科撰要』は寛政五年（一七九三）に刊行が始まり、十八巻の刊行が完了したのが文化七年（一八一〇）であった。このように長い歳月を要したのは寛政十年（一七九七）に玄随が亡くなった事情もからんでいるであろうが、訳書の出版が容易でなかったことも物語る。

一方、文化年間に入ると翻訳医書の出版が相次いで行われた。訳者も江戸の蘭学者だけでなく、京都の新宮涼庭（『窮理外科則』）大垣の江馬元恭（『五液診法』）など各地の蘭学者の手になるものの出版がみられる。また、文化二年には大阪の伏屋素狄の『和蘭医話』が出版された。これは翻訳書ではないが、多くの西洋医学の知識を咀嚼し、また自ら実験して会得した知識を述べたものである。文化五年に出版された宇田川玄真の『医範提綱』も平易な文章で、正確に人体の解剖・生理を説いている。

文政年間に入ると翻訳医書の種類は多様化し、大著の刊行も短期間に行われるようになった。

天保時代に入ると蘭学者の層はいっそう厚みを増し、各種の書物の翻訳がなされ、出版される。宇田川榕庵が『舎

密開宗』を出版したのは天保八年（一八三七）であった。また天保十二年には伊藤圭介が『新訂種痘奇法』を出版し、ジェンナーの種痘法を紹介したが、翌十三年、幕府は翻訳書の出版は医学館の検閲を必要とすることを通告した。そのため江戸では弘化二年（一八四五）にその出版が天文方の検閲を受けた上、奉行の許可を受けるものと変更されるまでは、出版される本の種類は激減した。宇田川玄真の『医範提綱』の再版は弘化二年（一八四五）に出され、それが大量に出廻った様子がうかがえる。

弘化二年、天文台に出版の検閲権が移るや出版された翻訳医書の種類が増えた。その傾向は安政年間に入るといっそう隆まる。しかし、幕末の動乱のためか文久年間から明治維新までの間に少し減少がみられる。この時期に注目すべきことは、それまで蘭書からの翻訳書ばかりであったのが、アメリカの医書からの翻訳書が登場したことである。

明治になると原本の言葉は蘭・英（米を含む）・独となるが、その割合が年と共に変化し、明治十年代の後半には蘭書からの翻訳はほとんど姿を消していた。それに替ってドイツ語本からの翻訳が目立って増える。つまり、明治初

年、英米の医書がオランダ語本に替って訳され、出版されたが、ドイツ語で医学を学習した東京大学の卒業生や学生が医書の主な翻訳者となった明治十年代後半には、ドイツ語本からの翻訳書が圧倒的に増えた。

(1) 日本大学医学部図書館 (2) 順天堂大学医史学研究室